
彼女

海山ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女

【Nコード】

N6097S

【作者名】

海山ヒロ

【あらすじ】

ナカイマリ。

二年前からの隣人。

一年と九カ月前からの飲み友達。

文学部フランス語フランス文学科の二回生で、ぼくと同い年。

特別美人なわけでもスタイルがよい訳でもなく、口は悪いし気は強い。

そんな彼女を、ぼくは好きなのです。

「いらっしゃい」

入り口の扉のきしむ音がして、顔をあげたマスターのトオルさんが、笑顔でそう言った。

「こんばんは」

少し低めの甘い声。

風が、店内へ夜気を運んでくる。

「すこし遅かったな」

振り返らずにそう言ったぼくに答えるように、白い小さめの手が後ろから伸びてきて、カウンターのグラスを掠め取った。

「あーっ！口つけたばっかなんだぞ！」

白い喉を思い切りよくそらせ、コクコクコクと三度鳴らして彼女がぼくのビールを飲み干す。

「ごちそうさま。今日は忙しかったから喉が渴いちゃって」

唇にのこる泡を人差し指でぬぐい、にこりと笑う。

ぼくはグラスに残った泡が空しく消えていくのを眺めるしかなかった。

「今日も、だろ？お前もあんな忙しい店、よく続くよなあ」

この店での定位置であるカウンター端のスツールに腰かける彼女をちらりとみた。

あどけなさの残る目もとや意外にしっかりした肩口に、すこし疲れがのぞいてる。

「びんぼー学生ですからね」

彼女の言葉に、ぼくらの前でシェイカーを振っていたトオルさんが、ふきだした。

「の、割りには三日とあけずに来てくれるよね、マリちゃん」

「トオルさんのお酒はおいしいから。わたし、ここ以外には行かないし」

「これからもよろしく」

目尻にしわを浮かべて、トオルさんが笑う。

ほの暗いショットバー。

低く、かすかに流れる歌声。

今日はトオルさんの好きなアリアだろうか。

「ナリくん、今日はなにを撮ったの？」

ギネスビールを注ぎながら、マリが小首をかしげて聞いてきた。

セミロングの髪が、さらりと揺れる。

「ナリくん？」

すこし紅すぎるぽってりとした唇が、ぼくの名を呼ぶ。

「これおごるから飲んでよ」

ギネスの太い瓶を、音をたてずにカウンターの上ですべらせ、くるくるとよく動く大きな瞳が、上目づかいにぼくを見る。

「ナリくん？」

「じゃ、遠慮なく」

ナカイマリ。

二年前からの隣人。

一年と九カ月前からの飲み友達。

文学部フランス語フランス文学科の二回生で、ぼくと同い年。

特別美人なわけでもスタイルがよい訳でもなく、口は悪いし気は強い。

それが、ぼくの好きな彼女だ。

「いらっしゃいませ」

いつものセリフに迎えられ、なに気なく顔をあげたぼくは、少々面食らってしまった。

いつもはほの闇に紛れてしまうくらいにしか客のいないこの店に、人があふれていたからだ。

「今日、なんかありましたっけ？」

ぼくの定位置、カウンターの奥から2番目に腰をおろし、トオルさんにギネスビールを頼んだ。

「いいや。金曜日っていうのもあるだろうけど、たまには混んでる日もないとね」

いつも通りのんびり笑っている。店の経営者としては人が多い方がそりゃ良いだろう。

店内をみまわしてみる。カウンターは、となりをのぞいてすべて埋まっている。五つしかないテーブル席は一杯だ。しかも、よく見れば店を埋めているのは、ほとんどが男女二人連れ。

金曜日の夜。ジャズがゆったりと流れるほの暗いショットバー。

「デーとはもってこいの場所だな」

ギネスをなめつつぼくは独り、苦笑した。

額を寄せ合いひそひそと低い声でささやく男と女。

「ひとり者には目の毒ですね」

ぼやくと、前でグラスを磨いていたトオルさんが微笑した。

トオルさんは、グラスを傷つけるから指輪はつけていないが、奥さんと娘さんの写真をカウンターの前に飾っているのを、ぼくは知っている。

「……マリでもいりゃいんだけどな」

思わずこぼれた言葉に、通りがかりのバイトの原口くんが、

「彼女なら来てますよ。ほら」

入り口近くのテーブルを指した。つられてそちらをみる。

——いた。

「……へえ。今日は女っぽい格好してるじゃないか」

つぶやき、ぼくはすぐ視線をはずした。

「マリも今日は彼氏連れか」

「いいですねえ」

原口くんはのんきにグラスを洗いながらあいづちを打つ。

「原口君。二番テーブルにこれ持ってってくれるかい？」

「あ、はい」

いつの間に用意したのか、トオルさんがアイスペールを彼に差し出し、原口氏は退場。

「……ギネスかい？」

グラスを拭く手元を見たまま、トオルさんがきいた。

マリが来ていると原口くんが言ったとき、その顔が微妙に曇った気がする。

しまった、とでも言うように。

「XYZ、お願いします」

ギネスがすこし残った、背の低いグラスを押しやる。

この店の照明は暗い。あっちのテーブルとぼくのいるカウンターでは端と端で離れ、ひとの顔などほとんど見えないはずだ。

ぼくだって、ほんのチラッとしか見てないし。

「どうぞ」

目の前に置かれた透明なカクテルを、ひと息で半分以上、喉の奥に流し込んだ。

喉に冷たさを感じた瞬間、胃の腑が燃えるように熱くなってきた。

マリが、テーブル席についているのを初めてみた。男連れなもの。酔いが、急速に下から上へと伝わってくる。こめかみのあたりが、鼓動にあわせて脈打っている。

セミロングの髪が、ほの暗い照明の中、妙に艶めいてみえた。

もうひと口、飲み下す。

いつもより濃いめにぬられた唇が、なにかさやいていた。彼女の前には、男の広い背中があった。

もうひとくち。今度は喉元から酔いがひろがる。

男の左手には、K O O Lの箱があった。

こめかみの鼓動と呼応するかのように、頭の中で、さっきみた光景がフラッシュバックする。

珍しくタイトスカート。ヒールのあるパンプス。グラスを持つ彼女の白い手には、指輪が光っていた。

ドクンッドクンッ。

耳の中にまで鼓動が響いている。うるさい。

彼女と男の間に置かれた灰皿には、吸い殻が山となりかけていた。
ドクンッ、ドクンッ！

まるで周囲とくぎるように、ふたりの周りには、煙の霧がたちこめていた。

ズキン、ズキン。

鼓動が痛みに変化する。

「……………煙草は嫌いじゃなかったのかよ」
煙のむこうには、彼女の笑顔があった。

「いらっしゃい」

「あれーナリくん」

店に入った途端、カウンターから声があがった。

見れば、マリが大きな目を輝かせて手を振っている。

「ギネスお願いします」

注文と同時に、トオルさんはギネスの小瓶とグラスをカウンターに置いてくれた。

「ナリくんここで会うの、久しぶりだね」

伸びてきたトオルさんの手を制して、マリがビールを注いでくれる。

彼女の前には相変わらずの赤い色、ブラディーマリーが置いてあった。

「ーそうか？」

「うん。一カ月ぶりくらいじゃない？」

「……撮影が立て込んでたからな」

ぼくはしなくてもいい言い訳をしてい r。

「大変だねえ」

屈託なく笑う、マリ。

撮影はたしかに多かった。アルバイトでやっているカメラマン助手（ようするにただの雑用）の仕事で、この頃連日朝帰りだった。

ぼくの雇い主、「師匠」は、6歳上の兄貴の先輩で、新初人という。なにやらおめでたい名前だが、本名だそうだ。年は、知らない。バイトのない日は大学の課題におわれ、講義が終わればアパートに帰り、コンビニ弁当やカップラーメンを片手に図面をひいていた。ぼくの選考は都市建築で、製図はもちろん、大学を設計した教授の指導（趣味？）により、校舎のあちこち、近所の病院に幼稚園、はてはゼミ行きつけの居酒屋まで測量したりする。

「人間がより快適に生きるために建築はある」という彼の持論におされ、住環境がひとに与える影響を学ぶために心理学の講義もとっている。そしてもちろん、その課題も、机の上を占領している。

アルバイトと大学の勉強で、ぼくの学生生活はそこのサラリーマンよりも過密なスケジュールだと思う。このご時勢では幸運にも仕送りだけでやっていけるのだから、時折、大学だけに専念しようかとも考える。けれど。

なにもない空間に自分の思い描くモノをつくりあげる建築と、すでにあるモノを自分の中へいったん取り込み、再創造する写真。なにかをつくる、表現するというこの2つの手段は、ぼくをずっと虜にして離さないのだ。

マリをのぞいては。

この一カ月、またあの光景を見てしまうかもしれないと、ぼくはこの店にすることが出来なかったのだ。

「ねえナリくん」

「……なに」

物思いに沈むぼくなどまったく気にせず、マリが肩をつついてきた。

「ナリくんはね、死ぬ時になにか残す？ 遺言とか、遺書とか？」

「……なんの話だ？」

彼女の話はいつも唐突にはじまる。

「ほら、この前アメリカで猫に全財産を残したひといたでしょう？ トオルさんといまその話をしてたんだ」

彼女の言葉をうけて、トオルさんがカウンターの下から数日前の新聞を見せてくれた。

――先月突然亡くなった米建設業界の大立者であるR氏の遺言書がこのほど発表され、大株主であった複数の企業の株式を除く全財産（推定数兆ドル）をたった一匹の飼い猫に遺した――

海外面のトップには、お世辞にもかわいいとは思えない太った白猫とその記事が踊っていた。

「ああ、これか。……確かワイドショーでも騒いでたな。で？これがなんだって？」

「このRさんは、この子がかわいくてしょうがないから、自分が遣せるものをのこしたんだよねえ？」

マリは、考える時の癖である人差し指を軽くあごにつけ、どこともない空間をみつめる動作をしている。

「わたしは猫じゃないから分らないけど……その猫は嬉しいのかな？それにこのひとはそれで『彼女』が喜ぶと思っていたのかな？やれやれ。どうやらまた始まったらしい。

彼女がぼくの住むアパートの隣りに引っ越してきて、このバーで偶然会って以来、ぼくらは一緒に呑むようになった。

彼女の酒は湿っぽくも、説教くさくもないよい酒なのだが、呑むほどに饒舌になってゆくのだ。昨日読んだ本について。ある友人の話。新聞のテレビの政治面から死亡欄に、帯び広告。はては近所のおばさんから聞いた話まで、良くそこまで話題があるものだと思えるより感心してしまうほど、酒ですべらかなになった唇と舌は、世間のさまざまな事柄にふれ、「解説」してゆくのだ。

いつの頃からか。彼女が話し、ぼくが聞くという形が出来上がっていた。

「ねえナリくん？」

「……さてね。他にできることがなかったんだろ。このおっさんには子供や親類がいたようだけど、金を遺したいような相手じゃなかった。このデブ猫だけがおっさんにとって恋人や家族みたいに大事で、その『恋猫』がこれから困らないようにしたかったんじゃないか？」

「彼女は嬉しいのかな？彼女が仮に人間だったとしても」

「もらえるモノは、もらっとけばいいだろ」

ぼくのグラスは空になっている。

彼女のグラスは、まだ半分以上が赤い液体で満たされていた。

それをひといきで飲んで、マリがさらに質問を続けた。

「ナリくんならさ、いやな例えだけどだれか大切なひとが亡くなった時、遺産として何か遺してもらって、嬉しい？」

それこそ猫の目みたいに色の変わる瞳が、ぼくを見ている。こんな風に……じっと見つめてくる彼女の瞳は、とても綺麗だと思う。底のそこまで澄んだ、覗くものすべてをひきこむ泉のようだ。

「……その時になってみないと、なんとも言えないな……」

さりげなくその瞳から視線をはずし、ぼくはしばし考えた。

「誰かが死んだことでなにかを得るってのは、好きじゃないな……。遺されたものは受け取るだろうけどー嬉しい……わけじゃないな」
マリがおおきく頷いた。

「だよな？自分を思ってくれたその気持ちは嬉しいだろうけど。物とか形のあるものはいつまでも残るし、そこに価値がある気がするけれど、『思いでの品』ってなかなか辛いこともあるよね」

コクリと喉をならしてカクテルを飲む。

「さて。ここからが本題です。もし逆の立場に……ナリくんが遺す側になった時、なにかのこしますか？」

またあの瞳が、ぼくを覗きこむ。

この瞳に出会うたび、ぼくは目を逸らしてしまう。

美しい瞳だ。けどその瞳は、ぼくが隠したいと無意識に願うものまでうつしてしまいそうで、いつも自分から逸らしてしまう。

今夜も、また。

「たぶん遺す」

「なにを？何故？」

即座にききかえしてくるマリ。

「何かなんて分かるか。……お前はどうかんだよ？」

切り返しの鋭さと瞳にドギマギしていたぼくは、なんとなく悔しくなっただけ逆襲してみた。

「わたしは、遺さない」

あらかじめ用意してあったのか、間髪入れずにきっぱりと言い切る。

「なんで遺すの？」

泉のように透明だった瞳に、挑戦的な色が浮かんでいる。

ぼくを惑わす。

「何故か……。俺が死んでも、モノがなにかが残れば俺がいた証になるから……。かな」

言葉がするするでてきた。そんな事、いままで考えたこともなかったのに。

「証？」

鋭い声。なんだか追い込まれて行くような気になる。

「遺言なんてのは、言ってみりゃ自分が死んだ後でもひとに影響を与えたいから、残すんじゃないのか？」

自分でも弁解じみてきこえるぼくの答えに、マリがふいと視線をはずした。

なにかを見極めるように細められた目が、虚空をにらんでいる。

「わたしがもし遺言をのこすとしたら、こう書く。

『忘れて。わたしがしたこと、話したことを、わたしがこの世にいたことそのものを、忘れて。わたしが死んだいまこの瞬間から。お墓なんていらぬ。死体は灰にして、海や川、野にでもまけばいい。お願いだから、わたしのことを、絶対に思い出したりしないで』

時とともに忘れ去られ、『あの人はいいひとだった』なんて、時折思い出したように言われて。悲しくもないのにその場の雰囲気で泣かれるなんて絶対に嫌。

ひとの記憶なんて、時間がたてばうすれてゆく。それは当たり前だからいいの。でも、いつか忘れられるくらいなら、最初からなにもない方がいい。それにね」

口をはさむ隙を与えず、彼女が続ける。

ぼくはただ、その良く動くつややかな唇をみていた。「証？自分の生きた証をのこしてどうなるの？誰かの記憶の片隅に思い出として残って、なんになるの？

思い出でしかなく、死んだ瞬間にそのひとのすべては終わるのに、

残したかった思い出もやがて消えてしまつて、ものだけ、言葉だけのこるなんて、空しいと思わない？」

そう言い放ったマリは、口の片端だけあげ、皮肉いっぱい表情を浮かべていた。

その顔は、必死になつてなにかを残そうとしている人々を、笑っているようにみえた。

「……お前のその理屈だと、建築とか芸術そのものが空しくなってくるな……」

反論めいた言葉をかえしながらも、ぼくはなんだか、とても悲しくなってきた。

彼女の一見ストイックな、排他的ですらあるその言葉の中に、「忘れないで」という切望を感じてしまったから。

忘れられるなんて、耐えられない。それなら初めから、なににもなしにして……。

彼女のものすごく脆い部分をみてしまった気がして、ぼくは罪悪感を覚えてしまった。

マリの横顔を、ちらりと盗み見た。

なにを考えているのか、その横顔は店のほのぐらい灯りの中できんで見えた。

強がりばかりいうマリ。彼女自身は、そのことに気づいているのだろうか。

そしてあの男――K O O L煙草の男は、そんな彼女の脆さを分かっているのだろうか。

「ごちそうさま」

満足げな笑顔とともに、本日最後のお客が帰っていった。

「はあ。今日も疲れましたねえ」

深々と礼をしたあととほっと息をついたマリに、後輩バイトの由紀が大仰なため息をついてみせた。

「そうだね。今日はお客さん、少し多かったね」

マリは卓上のタバスコや胡椒の容器を集めながら答える。

その言葉に、由紀は思いきり顔をしかめてみせた。

「少しじゃないですよー。『お待ち』のお客様が、あっちの方まで列つくってたじゃないですかあ」

由紀のミニウィンナーのように短い指が、店の出入り口から5メートル先の雑貨屋をさす。

「甘いね由紀ちゃん。わたしが入った頃なんて、あっちの方まで列がつづいてたもの」

笑ってさらに数メートル先をマリがさすと、由紀はすつとんきょうな声をあげた。

「ホントですかー？」

アイメイクを駆使して大きくした目を、それこそめいっぱい見開いている。

オフィス街に程近いショッピングモールの、イタリアンレストラン。それが、マリのアルバイト先である。店員五十名程度の店内は、シンプルかつシックな内装で、仕事帰りにスーツできても、遊び途中にジーンズで立ち寄ってもはまる、カジュアルな雰囲気。ランチで千五百円以上からと値段はそこそこ高いが、デザートの種類が豊富なのと、雑誌に何度も紹介されているお陰で、二十代から三十代の女性たちに、絶大な人気があるようだ。

マリはいままで、暇な日というのを経験したことがない。後輩の

由紀にも言ったとおり、彼女がここでバイトをはじめた当初は複数の女性向け雑誌に「穴場発見！おしゃれランチはここしかない！」などと紹介されたばかりで、雑誌を手にした制服やスーツ姿の女性客でごった返していた。最初の数週間マリは、ただ先輩たちに言われるままに、テーブルと厨房を行きつもどりつしていただけだった。「さて片付け片づけっ」と

その言葉を合図に、由紀たち後輩も片付けを始めた。

いまやマリも「リーダー」と呼ばれるバイトの統括係りになっている。新人が入ってくればイロハを教えねばならないし、自分の分はもちろん、他のバイトがとった注文も把握しておかねばならない。店長はもちろんいるし、社員も常に一名以上いるが、レジ打ちもし、時折いらっしやる嫌なお客の前で後輩がトチれば、飛んでいって一緒に平謝りすることもある。社員並の責任と義務を求められていると、重荷に感じることもある。

だがマリは、この仕事が好きだった。

すべて自分でやった方がよほどスムーズに動けるし、精神的にも楽だが、最近は新人に仕事をふることも覚えた。途切れることなく来店するお客さまに対応し、汗だくになりながらも大過なく一日を終えた日は、晴れ晴れとした気分になる。もともと机にむかって何かするよりも体を動かしひとと接することが好きだったが、この店は時給の高さで選んだのだ。入りたての頃、時給と仕事の大変さをはかりにかけて、辞めようかと思ったことが何度もある。

いまは、ここより時給の高いバイトとでも、かえたいとは思わない。自分の自由になる金のため、さらにはバイトそのものへの興味からはじめた仕事で、大学の講義をおろそかにするつもりは毛頭ないが、ここでの「仕事」も、いまでは大切な生活の一部になっていた。

「―お疲れさん」

店長の小西が、店の奥からレジ集計を終えてでてきた。

「あ、店長。お疲れさまです」

ペコリと頭を下げたマリに、小西はもはや地顔になってしまっているらしい営業スマイルを見せ、

「マリちゃん。悪いけどこれ、うえの方まで届けてくれないかな？」
A4サイズの茶封筒をポンとよこした。中には書類でも入っているのだろう、すこし厚みがある。

「はい、事務所へですね」

マリはそこへ、前にも使いに行っていた。

「そう。悪いね。ぼくは電話を待たなきゃならないんだ。まだあっちには誰が残ってるはずだから」

「分かりました」

小西はもう一度悪いねを繰り返し、奥へと戻っていった。

「由紀ちゃん、わたしちょっとお使いに行ってくるから、あと頼める？」

近くにいた後輩の由紀にそう言いおくと、マリは店をあとにした。

「失礼します。レストラン『ANNAIS』のものですー」

蛍光灯に照らされた室内に、声が空しく響いた。

マリは、それでも一息つくと、静まり返ったオフィスを見回してみた。

ショッピングモールの終業は八時。だがレストランフロアは十時まで営業しており、最上階にある駐車場は十時半まで開いている。モールを運営する事務所もそれにあわせて人が残っているはずだが……。

「すみませーん、どなたかおられませんか……？」

無駄かなと思いつつ、マリは先程より大きめの声をだし、もう一度呼びかけてみた。

電気だけが煌々とした無人のオフィスは不気味だ。ただでさえレストランのある四階から事務所のある七階まで、やたら靴音のひびく従業員用通路をとおって、うすら寒い思いをしてきたのである。

「……いませんよね……？」

だんだん小声になりながら、マリは後ずさりをしていた。と、

「中井」

後ろでいきなり声がした。

悲鳴を飲み込み、さっと振り向くと、廊下の奥の小部屋から、コーヒーカップを手にした男がでてきた。

「……田崎さん！驚かさないでください！」

「お前が勝手に驚いたんだろ」

軽くにらみつけるマリに、コーヒーカップの男、田崎は悪びれずに答える。

「飲むか？」

田崎がでてきた小部屋は、給湯室のようだ。田崎の白い大きな手に握られたマグカップからは湯気がたっている。

「ありがたいお申し出ですが、仕事中ですので」

マリの答えに、田崎がちいさく笑う。

「あいかわらず真面目だな。その真面目な中井さんが、仕事をほり出してなんの御用でしょう？」

わざとらしく腕をあげて時計をちらりと見る。

「店長からのお届ものです」

マリは、その手に茶封筒を押し付けてやった。

田崎はそれを片手で受け取ると、そのままスタスタと部屋へ入っていく。自然マリもその後について行った。

「ま、座れよ」

田崎がどこやらから引っ張ってきてくれた椅子にあさくこしかけたマリだが、目の前の、自分の席に落ち着いた田崎の仕草におもわず笑ってしまった。

「すこしは控えるんじゃないかなかったですか？」

左手で珈琲をすすりながら右手で胸ポケットを探る田崎に言うてみる。

「だれがそんなこと言った？」

KOOLと箱をななめによぎるロゴ。白地に緑の縁取りがされた箱の端をかるくたたき、一本取り出す。

うまそうに吸って吐く煙の向こうで、『オフィス内禁煙!!』の張り紙が、すっかり黄色く変色していた。

「ふん。こりゃ明日だな」

田崎がくわえ煙草で封筒から何枚か紙をだしてめくった後、つぶやいた。

「……今夜も残業ですか？」

周囲の席に点在するパソコンの電源はすべて切られ、静かなオフィスにはマリ達以外のひとの気配がない。

「まあな」

「所長さんなのに大変ですね」

田崎は、マリのその言葉におおげさなため息をついてみせた。

「ばか者。中間管理職つてのが、一番残業するんだぞ。いまの若いやつは定時でさっさと帰るしな」

いやに実感のこもったその言い方に、マリは声をあげて笑ってしまった。

「その発言、『オヤジ』ですよ。田崎さんまだ三十二でしょう？」

目の前に座るこの色白の男。名を、田崎雅也という。三十二歳。このモールを管理する事務所の所長をしている。モールチェーンの本社から出向してきたと聞いたことがあるが、この年齢で所長になるくらいだから、かなりのやり手なのだろう。柔和な顔とのんきな軽口からは、彼がばりばり仕事をこなしている姿など、マリには想像できないが。

最初にこの事務所へ使いに来た時。マリは入り口ちかくに突っ立っていた田崎に、

「すみません、所長さんおられますか？」

とたずねてしまった。

すこし困ったような表情を浮かべる田崎の横で、制服を着た年配の女性がぷつと吹きだし、

「所長、お客様ですよ」

マリの目の前にいた田崎を読んだのだった。

「恥ずかしかったなあ、あの時は……」

「何が？」

マリのつぶやきに、田崎が不思議そうに聞きかえす。

「いえ別に」

赤くなった頬をかくすように手を顔の前でふり、マリは勢いよく立ち上がった。

椅子がギイッと鳴る。

「御仕事お疲れさまです。わたしはまだ店の片付けが残っておりますので、これで」

「明日、何限からだ？」

照れ隠しの早口を、笑顔でさえぎられた。

「は？……二限から……ですけど……？」

あごをひき気味にしてこたえるマリの言葉に、田崎の笑顔が大きくなる。

「よし。一杯だけつきあえ」

言うなり机の上の書類を引き出しにほうり込みはじめる。

「へ？あの、田崎さん……？」

あわてるマリを尻目に片付けをおえた田崎は立ち上がり、大股で出口へ。その足取りはどこまでも軽い。

「あの、田崎さん？急に言われましても、片付けもまだ」

「いま何時だ？」

追いつがって言いつのるマリの前に、腕時計をはめた左手が差し出される。

その腕も、見られるほど白い。

「……十時二十分、です」

「お前いつも十五分頃には片付け終えて、着替えてるよな？」

最終点検とでも言うように、ぐるりとオフィスを見渡しながらそういう田崎に、マリは頷くしかない。

確かに、いまから店にもどっても、由紀たちバイトは帰った後だろう。もちろんマリが帰ってこないのも、店長に厨房の片付けをしているキッチンスタッフ数人くらいは残っているかもしれないが。鼻歌まじりに歩く田崎に、マリは仕方なくついて行った。なんだからまくはめられているようで悔しい。

レストランのある四階で、ふたりだけに乗せたエレベーターがとまった。

無言で降りようとするマリの背中に、田崎のすこし不満げな声がとどいた。

「なんだお前、俺と飲むのがそんなに嫌なのか？」

「違いますよ！」

あわてて振り向いたマリに、満面の笑顔。
ヤラレタ。

「じゃ、下で」

得意そうな顔が、扉の向こうに消えた。

「まゝた引っかかった……」

ため息とともにそうつぶやいたマリだが、

「仕方がないか」

クルリときびすを返し、駆け出した。

その足取りは、はねるように軽やかだった。

4 (前書き)

ずっと放置していました。

もしお待ちのかたがおられたら、すみません。

ものがたり自体はブログで完結掲載済みです。
こちらでも順次掲載していきます。

「お疲れさまでしたー！ いまから昼休憩でーすッ。午後は天気の良い合みですが、一応2時からですんで、ヨロシクーッ」

進行係のバイトくんが、メガホンを通さずとも聴こえそうな大声でそう宣言すると、だれもがホッと息をつき、三々五々散っていった。

すこし歩けば有名な中華街があるこの港ちかくの公園には、早朝から数台のライトバンが停車し、大小さまざまな機材と大勢の人間が広い園内を移動していた。

木陰に停めた車からもゆらりと陽炎が立ちのぼりそうな真夏日にもかかわらず、その中の背の高い何人かは、分厚いコートやセーターを着込んでいた。

「午後も晴れますかね？」

ぼくはすこし雲のでてきた空をみあげ、持っていたレフ版をおろしてかたわらの新さんーぼくの師匠で本日の主役、カメラマンーにきいた。

「さてな。すこし曇ってくれたほうが、こっちは助かる」

撮影中ずつとのぞき込んでいたファインダーから顔をあげ、彼はおおきく伸びをした。

早朝からの撮影でもともと浅黒い顔が真夏の太陽に焼かれ、黒光りしている。

「あちーなしかし。オイ、ナル。悪いけどなんか冷たいもん買ってきてくれ」

新さんは額を伝う汗をシャツの袖で無造作にぬぐうと、ジーンズのポケットから財布を抜き、投げてよこした。

「アイスでいいですか？」

そう聞くぼくのTシャツも、絞れるくらいの汗でじっとり濡れ、背中にはりついている。

「おう。お前のも買ってこいよ。俺のは――」

「『ゲロ甘な』やつですね」

ぼくの答えに新さんは満足げに頷いた。

屋外の撮影が多いせいか、常に浅黒い肌。身長は178のぼくと目線が同じ。でもシャツの上からでもわかるその胸板の厚さは、普通じゃない。ぼくの倍くらいはありそうだ。短く刈り込んだ黒髪にそげた頬。切れ長の三白眼はいつも濃いサングラスで隠され、そのうえの太い眉はあくまで厳つく……。

そんな硬派なみかけとは裏腹に、彼はそういった甘党なのである。撮影の後よくおごってもらのだが、それが焼き肉であろうと鮭であろうと、必ずデザートを頼む。しかもぼくなどは見るだけで胸焼けしそうな特大のチョコレートパフェやイチゴショートケーキを、その時はサングラスをはずして目を細めながら実に幸せそうに食べるのである。

いつだったか居酒屋でデザートが品切れになっていた時など、きりきりと音がするくらいにその太い眉をよせるや、足音高くその店

をあとにしてコンビニへと走った。

夜中の二時だった。

「暑い……」

アスファルトの照り返しを受けながら、ぼくは徒歩百メートル先のコンビニに向かった。

ふと振り仰ぐと、まっしろな入道雲が道路の左右に林立するビルを覆いつくすように、ぼっかりと空にうかんでいた。

真っ青な空。

雲の白。

ビルの窓ガラスの銀色。

この三色がふりそそぐ太陽のひかりに縁取られ、強烈なコントラストを描いていた。

「アチ」

口からは熱い息といっしょにそれしか出てこない。影を選んで歩いても、体中から汗がふきだしあごを伝い、したたり落ちる。撮影中はまったく気にならなかった蟬の声がいまは耳にまとわりついて、暑さをいっそう感じさせた。

午後一時になろうとしていた。

木々の影は短く、濃い。道行くひとびともぼくとおなじように暑さにのぼせ、ふらふらと、それこそ立ちのぼる陽炎のように揺らいでみえる。

でも。

この炎天下、モデルたちは撮影中、汗ひとうかいていなかった。

今回は雑誌のグラビア撮影とかでモデルも大勢いて、モデルを「のせる」ために音楽なんかもかけてずいぶん騒がしくしているのになにかこう……ピンと張り詰めた空気があたりにただよっていた。

真夏の、体中をとりかこむ湿った大気の中。モデルたちは凜然とたたずんでいた。季節を先取りするファッション雑誌の撮影らしく、厚手のセーターや革のコートを身につけていたのに。ただそこにいるだけで、確実に肌を焦がす太陽など存在しないかのように。カメラマンの新さんが「北風が吹いてきた」と言えばコートの前をかきあわせ、「寒いからこそ寄りそうんだろー?」と言えば、こんな時期ふれるのも嫌になる毛皮のコートにふたりでくるまり、頬を寄せ合っていた。

待ち時間には、クーラーを寒いくらいにきかせた車内にこもり、忙しげに団扇であおいでは汗もができると騒ぐか、長々とマグロのように横たわっているのとおなじ人間だとは思えなかった。

プロとは、すごいものだ。

グラビアは苦手なんだよと、撮影直前までぼやいていた新さんも、流れる汗を拭いもせずファインダーをのぞき込み、レフ版を持つばかりを時折どやしつけ、シャッターを切りつづけた。

あの時、彼のファインダーの中であの空間は、確かに冴えた陽に照らされた、木枯らし吹く都会の、冬だった。

「お待たせです」

コンビニから戻ると、新さんは園内のあずまやでひと眠りしているところだった。

ぼくの声に顔をあげたが、その目はぼくの右手の白いコンビニ袋へと熱く注がれている。

「みるく金時とリッチバナナ、どっちがいいですか？」

「両方」

すでにごつい手は袋へのびている。

「絶対そう言うと思いました」

自分用のかちわり氷を、新さんが大事そうに握りしめる袋からだした。

新さんは―幸せそうに両手にみるく金時とリッチバナナを持ち、見比べ、しばし逡巡し、やがて大きく頷くと、リッチバナナを食べはじめた。

もちろん、みるく金時はクーラーボックスで厳重に保管される。

カメラに向かうときよりも真剣そうなその表情に、ぼくは背をむけて笑いをこらえた。

「見物人が出てきましたね」

近隣の会社員だろうか。制服姿のOLさんや、クールビズはどこへやら。この暑さでもきっちりネクタイをしめたサラリーマンが、機材や、ぼくらと同じくあずまやでくつろぐモデルたちをちらちら

眺めながら通り過ぎていく。立ち止まって見ているひともいる。

「やっぱり珍しいんですかね」
「だろうな」

アイスに没頭していると思っていたが、新さんはあいづちを打ってくれた。

手にはいつの間にか、みるく金時が握られていたけれど。

眼を見物人へと戻し、ぼくも彼らを見物することにした。

ほとんどは、ワイシャツ・スーツ姿のサラリーマンと、ベストにタイトスカートの制服を着たOLさん。この公園のまわりには、市役所に新聞社、たしか、大手家電メーカーの本社ビルもあった気がする。暇なのか、珍しいからか。暑いのに彼らは立ち止まったまま、ボンヤリこちらを見ている。

ふと、気がついた。

大学生のぼくはいま夏休みの真っ最中だが、もうあのサラリーマンたちにはそんなものないのだ。夏になろうが冬になろうが、学生のように二カ月におよぶ「〇〇休み」は存在しない。いまはバイトに勤しむぼくだって、再来年、いや来年三回生なれば「就活」とやらを始めねばならない。いわゆるリクルートスーツを着て、会社訪問、OB訪問などで歩き回るのか。

あの中にはいる為に？

制服姿のOLたちは遠くにいるせいか、皆おなじ顔に見える。ネ

クタイにワイシャツのサラリーマンたちも。

ぼくは、自分がネクタイをしめ、しかめっ面で事務机に向かっているところを想像してみた。

誰だそりゃ。

大学の専攻は都市建築。だが自分で事務所でも開かない限り、宮仕えの身になるわけだ。いくつもの賞を総なめにするような大先生以外は、見物人の彼らと同じ、サラリーマンである。

写真はもちろん好きで、だからいまこうしているのだが、将来新さんのようなプロになろうとか、なれるとかは思っていない。もちろん、撮影がはじまれば、たとえ雑用係でもレフ版もちでも夢中になる。しかし、彼ら「プロ」とはなにかが違うのだ。

ぼくは将来このままの道を進み、建築家になるのだろうか……？

そこまで考えて、苦い笑いがこみあげてきた。

ついさっき、ぼくは二年後にせまる就職について考えていた。

けれど、実際に職種を考えだすと、「将来」などという、ひどくあいまいな時を思い浮かべている。大学生活の二年間など、あつというまに過ぎるだろう。入学した日すら、昨日のように思えるのだから。

高校で進路を決める際、ぼくの頭には建築の二文字しかなかった。周囲のおとなには珍しがられたものだ。「しっかりしてる」。たしか、そんな風にもいわれた。

そしていま。

希望どおりの大学に進学し、趣味の写真をバイトにできてさえる。このまま順調に大学のカリキュラムを消化して、建築家への道を歩むのか……？

あと二年ある。が、二年しかない。

確実に迫りくる「将来」。

自分たちを遠巻きにながめるワイシャツの群れの向こうに、それがいま、はっきりと見えてきた。

「ね、すこしは元気でた？」

「うん……。いまから会ってくる」

そうささやきあう声が、カウンターにすわるぼくの耳にも届いた。

「ありがとね、マリ」

「いってらっしゃい」

彼女のおどけた口調に真っ赤に腫れた眼がすこし笑んで、夜風のなかへと消えていった。

「すみませんトオルさん。お騒がせしました」

カウンターの定位置につくなり、マリが謝る。

「なあに。よかったね、彼女。元気でたみたいで」

トオルさんはいつもの笑顔だ。

「ナリくんもごめんね？」

そう言うときいさな頭がぼくの方にかたむいた。

「いや別に」

ぼろりと口からでた返事がそっけなさすぎた気がして、ぼくはあわてて付け足した。

「いいのか？あの子。もう11時だし、今夜は雨かなり降ってるぞ」

うす闇の中で、白い顔がほころぶ。

「彼氏が迎えにくるから」

「そうか」

ふと、湿り気をおびた夜風が頬をなでた。

客のだれかが出て行ったらしく、入り口の扉がゆれている。

午後からふりだした雨は、あいかわらず音もなくふりつづいてい
るようで、ゆらゆら揺れる扉のむこうからその気配だけがカウンタ
ーの奥にすわるぼくらまで、忍びよってくる。

「すこし驚いたけどな。あの子が泣き出した時には」

ギネスをなめながらそう呟くと、マリがすこし笑った。

いつものように、いつもの場所で。トオルさんと世間話をして
いたら、マリがやってきた。

「あの時」をのぞけばつねにひとりでここに来る彼女が、友達ら
しき女の子をつれて、ぼくらにちよつと目であいさつしたただでテ
ーブルに座り込んだので、内心首をかしげていたのだ。
頭をくつつけるようにして囁きあう女の子ふたり。

「ーだって、しょうがないのよ！」

悲鳴のような声がして、片方が泣きだした。

彼女は、泣き伏す友人の前で、じっと待っていた。

周囲の客の目も気にせず、慰めるでもなく諭すでもなく、ただじつと、泣きやむのを待っていた。

「……仲直りできるといいけど」

眉をよせ、マリがため息とともにそう言った。

その口調ににじむなにか、慈愛みたいなものを感じて、ぼくはすこし、意外だった。

あれは……いつだったろう？まだコートに必要な寒い日だった気がする。

ぼくらは今夜と同じような場面に遭遇したのだ。

二人組みの女の子たちがやってきて、入り口ちかくのテーブルに、寒そうに身をよせあって座った。

片方が突然、泣き出したのだ。

ぼくらはその時も、カウンターに並んで座っていた。

「別れりゃいいのに」

赤い液体をみたしたグラスをぼんやり揺らしていたマリが、ぽつりと呟いた。

「なんだった？」

彼女は泣いている子を、ちらりと横目でみた。

「

人前で、なんであんな風に泣けるんだろう？もし彼氏のことで泣いているのなら、別れればいいだけじゃない？」

そう不思議そうに問いかける瞳は、どこまでも澄んでいた……。

「『泣くくらいなら別れりゃいい』。そうじゃなかったっけ？」

ぼくの言葉に、マリは怪訝な表情を浮かべた。と、

「あれはっ」

思い出したようだ。目尻がすこし赤くなっている。

彼女の狼狽に気をよくして、ぼくはさらに突っ込むことにした。

「友達だからちがうって？」

「それもあるけど」

うつむき、口元でちいさく呟く。

「それも？ほかにも何かあるのか？」

しつこい突っ込みに、軽くぼくをにらんでいたマリだが、

「————ナリくん。経験って、すごいものなのよ」

いきなり、そう宣言した。

「は？」

展開についてゆけない。

「知らないということと、知っている。解っているってことは、全然違うのよ。『経験』がすべてではないけれど、ある意味すごいことなの」

いつの間にか彼女の前には赤い液体に満たされたグラスがあり、マリはそれをひとくち、口に含んだ。

「泣くくらいなら……。前はたしかに、そう思ってた。知らなかったの。その時のわたしは、まだ知らなかった」

もうひとくち。

「……しやうがないのよね。投げてるわけじゃないけど、本当にしやうがないのよ。どんなに嫌なところがあっても、そのせいで彼が憎らしく思えても、それでも好きなんだもの。どれだけ泣いても、そんな自分がいやになっても、好きなんだもの」

彼女の声が、頭の中でだんだん大きくなってきた。

「好き」。

その言葉が、あの場面をぼくの前に引きずりだす。

煙のむこうの笑顔。

すかしたKOOOLの箱。

彼女の紅い唇……。いま彼女の目の前にある液体のように赤い……。

ぼくは急に喉の渴きをおぼえ、いそいでギネスを飲み干した。

「で、いまは知ってるわけだ」

すこし喉が痛む。どうやら急ぎすぎたらしい。

「あの時よりは」

透明な瞳がぼくを見返す。

今夜はそらせない。

「へへえ。マリも大人になったもんだ。……やっぱり女は、男がで
きると変わるねえ」

茶化すような言葉がもれる。

誰をだ？

「男？」

マリが小首をかしげる。

いつの間にか、トオルさんがぼくらの前にきて、黙ってグラスを
磨いていた。

寡黙なまなざしが頬にささる。

「二カ月前、ここがえらく混んでた日があったろ？お前、入り口に
一番ちかいテーブルに座ってたよな？K O O L煙草の男といっしょ
に」

いってしまった瞬間。マリが、ほほ笑んだ。

その場の自分の感情すべてがふっとんで、見ほれてしまったくら

いきれいに。

「たぶん彼女は、自分が笑んでいることに気づいていないだろう。つつみこむような笑顔で、そおっと息をつくように、

「田崎さん」

その男の名を、呼んだ。

心臓が、痙攣する。ぐうっと引き絞られていく。
息ができない。

「そうか……あのとき、ナリくんいたんだ。……声かけてくれれば良かったのに」

彼女の笑顔が、ぼくを刺す。

人間は感情の動物だ。身体は感情に支配されている。
しかし例外もあるらしく、ガチガチに固まってしまったぼくの身体からでも、皮肉はもれた。

「馬に蹴られたくはないんでね」

笑う、マリ。

「田崎さんはそんなんじゃないよ」

紅い唇がひらめく。

「バイト先のひとでね。よく飲みに誘ってくれるの」

彼女の透明な瞳は、ぼくをみていない。その目にいま写っているのは、絶対にー。

「でもお前は、あの男が好きなんだろう？」

ばかやろう。

自分を心の中で罵倒する。いままでぼくらは、いろんな話をここでしてきたのに、おたがいの異性関係についてだけは、話したことがなかった。

話すなら、彼女と自分のことにしたかった。

「ねえナリくん？わたし、前に言ったよね」

「……何を？」

なにか思い出したのか、笑うマリ。

「なんだよ」

「不倫について」

「は？」

「読んで字のごとく、絶対にしちゃいけない事だって。妻子もちが、別の女と恋愛なんかしちゃいけないよねえ」

喉がひりつく。

なにが言いたいんだ？

彼女はなにを言おうとしている？

「田崎さんにはね、同じ年の奥さんと小学生のお子さんがふたり、ちゃんというの。でもねナリくん。妻子もちにする片思いも、『不倫』になるのかな？」

「……は？」

「わたしだけなの。あの人を好きなのは、わたしなの。不倫なんてだめ。絶対にしないと行ってたわたしが、あの人を好きなの」

固まったまま彼女をみかえすぼくに、無邪気に笑いかける、マリ。

「ね？ 知るってことは、すごいことでしょう？」

煙草なんてみるのもイヤ、不倫なんて絶対ありえないのわたしが、苦しけりゃ別れりゃいいのこのわたしが、ヘビースモーカーで妻子もちのあの人を好きなの。

好きで好きでたまらなくって、あの人顔を思い出すだけでにやけちゃって。毎日毎日あの人のことばかり考えて。手も顔も声も、あの煙草の匂いも覚えて。

田崎さんてね、色がすごく白いの。背が高くって。学校や街でそんな人とすれ違うでしょ？ 絶対にその時間そこで会うわけないのに、一瞬ハッとして振り返っちゃうの」

マリは白い頬を上氣させて一気にそこまで話すと、ほっと息をはきだした。

「ーなんで、こんなに好きなんだろう」

「……知るか」

無理してこたえる必要なんてなかった。
彼女はぼくを、みてはいない。

そうだな、マリ。

知らないってことと、知ってるってことは、まったく違う。

ぼくは彼女が好きだ。

それは、ぼくしか知らない。

彼女の目の前にいるぼくがいま、嫉妬で押しつぶされそうになっているのも、ぼくしか知らない。

確かに知ることはずいことだ。

でも良いことだとは、ぼくには言えない。

邪気のない、めったに見ることのできない彼女の無垢な笑顔が、ぼくは好きだ。

ぼくの気持ちを「知らない」からこそ、その笑顔があるのだとしたら。

ぼくはかわりに、この痛みに耐えねばならないのか。

ぼくは今日、それを初めて、知った。

「生きてるかい？」

トオルさんが目の前で手をひらひらと振っていた。

「……生きてますよ……」

ぼくはぼんやりと笑ってみせた。

なんだか顔中の筋肉がこわばってうまく動かせない。音がするんじゃないかと思うほど無理して顔を横にむけると、マリはいなかった。

「なかなか酷だね。——マリちゃんも」

片頬だけひきつらせて笑ったぼくの前に、やけに華奢なカクテルグラスがおかれた。

注がれるピンクの液体。

「ひさしぶりにね、つくりたくなったんだ」

目で問うたぼくに、いつもの笑顔でトオルさんがこたえた。

ひとくち。

「……にがい」

「でも後味は甘いだろ？」

返事のかわりにもうひとくち。喉にひっかかるような、独特の感触。

「うまいですね、これ。……知ってたんですね。トオルさん」

なにを意味するかは通じた。

「知っていたわけじゃないよ。……なんとなく、なんとなくね」

そうゆったりとほほ笑むトオルさんが、いますごく大人に思える。トオルさんはまだ30半ばのはずだが、そんな年齢的なものではなく、「大人の領域」にいるひとという余裕をその笑みから受けた。

「そんなに分りやすかったかな……」

「そうじゃないよ」

つぶやきに、トオルさんがちいさく頭をふった。

「一種の職業病だね。」

夜の7時に店をあけて、ぼくはそれから、一日中ここにいるんだ。カクテルをつくる、時折お客さんと話をする。休みの日以外、ずっとそうしているわけだ。

ぼくの世界はいわば、ここだけだから。このちいさな店が、ぼくと外との窓口になるんだ。新聞やテレビなんかじゃなく、直接の、なまの繋がりだね。

ここでのぼくは主役ではなく、この棚に並んでいる酒の瓶と一緒に、舞台装置みたいなもんだよ。

長いことこんな仕事をやっているとね、自然と話をきいているだけで判ってくることもある。この人は奥さんとあんまりうまくいてないな、とか。この二人は不倫しているのかな、とか」

そこでトオルさんはすこし言葉をきり、

「他のお客さんには内緒だよ。ほんとうはこんな風に詮索しちゃいけないんだから」

片頬だけで笑ってみせた。

「酒のある空間って、一種独特なものだと思わないか？どこか秘密めいた香りが、ここには漂っているとおもう。ひとはそこで、ほんのすこしだけ生の感情をみせる。酒の力と空間の魔力を借りてね。ぼくはそれを、時折垣間見ているだけだよ」

グラスを磨きながらそう話すトオルさんは、珍しく饒舌だった。慰めてくれているのだろうか。どうやらそれほど情けない顔をぼくはしているらしい。

舞台装置。脇に徹する、か。

この人もまたプロなのだ。自分の役割をきちんと見極め、動いている。

彼からみればぼくなど、まだほんのひよっこなのだろう……。いっぱしの大人ぶって酒など飲んでいられるけれど、女の子のことで他愛なくおちこむガキだ。

ぼくはすこしばかり自虐的になって、カクテルののこりを一気に飲み干した。

「酒はおいしく飲むもんだよ」

兄貴みたいな表情で、トオルさんがぼくをみている。

「苦い酒だってありますよ。まずい酒だってあるでしょう」

つい突っかかってしまった。
と。

「まずい酒がどうしたの？」

よこからマリがひょいっと顔をだして、無邪気にそうたずねてきた。

「天候によって葡萄酒はできを左右されるねって言ってたんだよ、マリちゃん」

さり気なさすぎるフォロー。

ああ、自分がさらに情けなくなってきた。

「ふーん……。今年も暑いから、出来がいいでしょうね」

マリは素直に応じている。

「さて。秋の天気は変わりやすいからね」

「あ、女心もって顔ですね」

おおきな目をくりくりと動かして、マリが睨むふりをした。

トオルさんはそれを笑顔で受け流して、テーブル席のほうに呼ばれていった。

「……あれ？珍しいね。カクテル飲んでる」

マリが小首をかしげてぼくの前のショットグラスをみつめた。

「なに？これ」

「知らん。トオルさんがくれた」

グラスの底に、ほんの少しだけ淡いピンク色が残っていた。

「飲んでもいい？」

「どうぞ」

マリは、肩をすくめたぼくに会釈でもするようにグラスをちよつとあげてみせ、思い切りよくひと息でのんだ。

「――知ってる。これ」

余韻を確かめるように喉にふれながら、つぶやく。

「へえ？」

「リリー・マルレーン……だと思う」

「女の名前か」

いつもギネスビールばかり飲んでいるが、カクテルにも結構詳しいと、自分ではおもっている。

彼女がいつも飲む「ブラッディー・マリー」など、ひとの名がついたカクテルは多々あれど、それははじめて聞く名だった。

「カクテルをつくった人の、恋人の名前なんだって」

「花のかわりにカクテルをとって？」

くさいなと笑うぼくに、マリは首をふってみせた。

「ちよつと違う。このカクテルをつくったバーテンダーには恋人の

がいて。結婚の約束もしてたんだけど、彼女は亡くなってしまったんだって。天国の恋人に贈ろうとしたんだよ、その人」

ひとり残されたバーテンダー。

彼にできた唯一のことは、恋人の名のカクテルをつくることだったのか。

なんにも遺さなかった彼女のかわりに、彼が残したのか……。

ふと、マリとおなじような会話をしたことを、ぼくは思い出した。

『どうせ忘れられるなら、最初からなにも残さないほうがいい』

でも……のこされた者は？

記憶さえも消してくれと言われたものは、どうすればよいのだろう。彼女をおもいだすよすがとなるものは、なにも、どこにもない。墓さえない。

あまりにも切ないじゃないか。

彼女が本当は忘れないでと願うように、のこされた人々も、忘れないと願うはずだ。

「せつないじゃないか」

知らずもれた呟きに、マリがこくりとうなずいた。

……じゃあなんでお前はそう言うんだよ？

「そのバーテンダーにはなにもなかったから、そのカクテルをつくったんだ。彼女とのものが、何もなかったから」

慎重に言葉を選んだつもりだったが、彼女は納得しなかったようだ。

「そうかな？」

小首をかしげてぼくを見る。

「なにかしたかったけど、もう彼女はいないから、何もできなくてでも、『何か』自分の手でやりたかったんだよ。思い出のためか、忘れないためか。だからこのカクテルを作ったんだと思う」

あっさりと一蹴されてしまった。

それはすべて彼自身のため。彼女の為じゃない。ふたりの為ではないのよ。

ぼくを見返す透明な瞳が、そう断言している。

うまい言葉がみつからず、ぼくは押し黙るしかなかった。

その間にマリは、カウンターにかえってきたトオルさんいオーダーしている。

「リリー・マルレーン、お願いします」

眉をほんの少しあげ、驚いた表情のトオルさん。それでもいつもの笑顔で応じる。

「マリちゃん。知ってたんだ、このカクテル」

ぼくと、ぼくの前の、空になったグラスをみくらべる。

「一度だけ飲んだことがあるんです」

軽快な音とともにあざやかな手つきでカクテルが作られ、彼女の唇を濡らした。

「の、ワリには、誕生秘話までよく知ってたな」

紅い唇に、目が奪われる。

そして、ぼくにあの夜を思い出させる。

「田崎さんが、教えてくれた」

煙の向うの、あの笑顔。

「大好きなひとと、最初に飲んだお酒なんだって」

いまぼくに向けられているのは、哀しそうな微笑みだけ。

今夜はもうだめだ。

夏の雨が、とんでもないものを運んできた。

いや。真実をみせつけてくれたのだろうか。

ああもういい。もういいよ。

彼女の瞳はぼくのものじゃない。その唇も声もぼくのものじゃない。ぼくには向かってない。

すべて、すべて「田崎さん」のものなんだろう？

気づかないうちに、声をあげて笑っていたらしい。マリが目を見開いてきいてきた。

「どうしたの？突然笑いだしちゃって」

喉をクツクツと鳴らして笑い続けながら、ぼくは彼女を真正面で見つめた。

「なあ。そんなに『田崎さん』が、好きなのか」

あろうことか、マリは瞬時に耳まで赤くなった。

「なに言って……」

「オイオイ、あれだけ自分で連呼しときながら、なんで赤くなるんだ？」

「いきなりっ……聞いてくるから……」

目をそらして、口のなかでなにやらごによごによ呟いている。

その妙にシャイな反応に勢いを得て、ぼくはさらに続けた。

「あれだけ熱烈な愛の告白をしてくれたじゃないか。ひとから聞かれるのは恥ずかしいとでも言うのかよ」

耳だけでなく、首筋までが朱にそまっている。

「……うん」

「まあいいじゃないか。恥ずかしついでに、ふたりの馴れ初めでもきかせてくれよ」

「……ナリくん……酔ってるでしょう？ひさしぶりにカクテルなんて飲んだから」

真っ赤な顔のまま、マリがぼくを軽くにらむ。

「酔っててもなんでもいいからさ。まあ話せよ」

重ねるぼくに、彼女はため息ひとつ。

「ナリくんが酔ってるところ、ひさしぶりに見たなあ……。そこの天気も変だけど、今夜のナリくんも変だね」

その言葉に、ぼくはピタリと笑うのをやめた。

言ってしまうのか。

あまりにも遅すぎて、陳腐なだけだけれど、言ってしまうのか。

「……たしかに、今夜は変だろうな」

でもぼくがその続きを言うまえに、彼女が口を開いてしまった。

「あれは……いつだったかな……」

雨は、まだ降りつづくようだ。

「あの子、ちょっとでしゃばりじゃない？」

話し声に、扉にかけた手がとまった。

閉店後の片付けも無事終え、着替えようとマリは更衣室に来ていた。

「わたしが注文とるじゃない？それで料理がでてくるの待ってたら、あの子がさっさと持ってっちゃうのよ」

中から聞こえてくるのは、バイトの先輩である、夕美子のようだ。

「気をつかってるんじゃない？」

この優しい声は、おなじく先輩の、夕美子といちばん仲がよさそうな薫のものだろう。

マリは、扉の前で足をとめたまましばし迷った。

中のふたりはどうやら、だれかに対する批評、というよりは陰口をいっているようだ。

漏れ聞こえる言葉から、おもに夕美子が文句をいい、薫がフォローしているように聞こえる。いま中にはいれば、話を聞いていたのがふたりに知られてしまう。やはりそれはまずいだろう。

「そうお？そんな風には見えないけどー？」

夕美子の口調にはかなりの刺がある。

———「あの子」ってだれだろう？

アルバイト先のレストラン「ANNAIS」には、現在マリをふくめて10人のバイトがいる。男女は半々。

夕美子と薫はもう3年目になるベテランの先輩たちで、マリも彼女たちに仕事のいろはを仕込まれた。特に夕美子とはシフトがかかることも多く、その仕事ぶりと明るいカラっとした姉御肌の人柄を、マリは慕っていた。

その夕美子が陰口をたたいている現場にいあわせてしまい、マリはすくなくからず驚いていた。

「そんな言い方しないの」

薫のやんわりと諭す声がする。

彼女は、どんなに店が忙しくてもそうしているように、ゆったりとした微笑をそのちいさな顔に浮かべていることだろう。

「マリちゃんは、まだ慣れていないから頑張りすぎちゃうのよ、きつと。その内ペース配分を覚えるわよ。だって、彼女がうちに来てからまだ2カ月じゃない」

いま、たしかに薫は自分の名をいった。

マリは、扉からゆっくりと後ずさった。

「じゃあなんで、2カ月しかたってない新人がチーフになれるのよ？仕事を覚えるのはわりと早かったけど、まだまだトロイところあ

るじゃない。店長にでも媚売ったに決まってるわ」

足がうまく動かない。

言葉が、つぶてのように飛んでくる。

「だいたい私、最初からあの子との事好きじゃなかったのよね」

マリは扉をみつめたままじりじりと後ずさる。

やめて、やめて。

扉が開きかけた気がして、弾かれたように駆けだした。
まるでその場から逃げだすように。

「……失礼！……なんだ、中井さんか」

声とともに、目の前の白い壁がひよいとわきにどいた。

「……田崎さん……」

薄暗い廊下。白いまあるい笑顔が、だいぶ上のほうに浮かんでい
る。

「……どうした？いつもの元気がないなあ。彼氏と喧嘩でもしたか

？」

ひとつだけの乾いた笑い声が、廊下に響いた。

田崎が、眉をよせてマリの顔をのぞきこむ。

「どうした？」

背の高い、色白で柔和な印象をうけるこの男――田崎とは、ひよんなことから親しくなり、会えば立ち話をする仲だった。

仕事で直接付き合いがあるわけではないが、店長のお使いでマリはちよくちよく、田崎が所長をつとめる管理事務所に行っている。

32歳で所長。しかし、その役職を感じさせない柔和な笑顔の彼は所内外で人気があるらしい。「義理」にはどう見てもおもえない気合の入ったチョコレートを受け渡し現場に居合わせたことがあり、苦笑とともにお裾わけしてもらったことがある。

外見からはまだ20代にしか見えない田崎に、マリも好感を持っていた。

「どうしたんだ？」

なんで、子供に聞いてるみたいに言うの。

うつむき、マリはつぶやいた。

ずっと走っていたせいで、心臓の音がうるさい。深呼吸をひとつして、いつものように笑顔で――

「中井……さん？」

田崎のやわらかく細められていた目が、おおきく見開かれた。

「……………何があった？」

頬がむずかゆいと思ったら、涙がつたっていた。

マリは、奥歯をぎゅっとかみしめ、いそいで横をむいた。

涙など見せたくない。たかがバイト先で陰口をたたかれただけじゃないか。

マリは、公私というほどおおげさなものではないが、バイトとその他の生活をかなり明確にわけていた。いくら親しくなったとはいえ、仕事でかかわりのある他人に、自分の生の感情をみせるのは嫌だった。

ほんとうならこのまま走って逃げたい。

しかし、それでは田崎が気にするだろう。これから彼とはここで顔をあわせるだろうし、気まずい思いはしたくない。

そう思うとマリは、根がはえたようにそこから動けなかった。ただ黙って横をむき、泣いているしかできなかった。

ちいさい頃から、悲しい時よりも怒った時、悔しい時に涙がでてきた。

いま心にうずまく感情がなにかはわからないが、マリは、全身で拒絶をあらわすように横を向いたまま、ただじっと立っていた。

「……………今日、残業だったんだよ」

「……………え？」

妙に明るい田崎の声がふってきて、マリは思わず彼をみあげた。

「事務所の人間はみんな帰ったのにさ、ぼくひとりでこんな時間ま

で仕事してるんだよ」

いぶかしげなマリの表情などまったく気にせず、どこまでも明るい田崎。

彼独特の、まあるい笑顔。

「だから、かわいいそうな僕と、一杯だけつきあってよ」

いつの間にか涙はつまっていた。

しかし、恥ずかしくてマリはなにも言えない。

「じゃ、下で待ってるから」

そう言い置くと、さっさと田崎は行ってしまった。

しばらくぼんやりとその広い背中を見送ってたマリだが、

「田崎さんが待ってるから」

勢いよく更衣室へ駆け戻っていった。

「いくつで所長になったんですか？」

コントラバスの低いうなりが身体にしみる。

「……………ん？」

カウンターにマリと並んで座る田崎は、誰かさんとおなじく、ギネスビールを飲んでいる。

マリたちのショッピングモールからそう遠くないところに、田崎の「隠れ家」はあった。

バーにしては広めの店内に、ぽつりぽつりと客がいた。

マリがよく行く「トオルさんの店」は、黒を基調とした装飾の、なんとなくニューヨークあたりにありそうなスタイリッシュな内装のバーだ。

田崎が連れて来てくれた店は対症的に、飴色のカウンターにがっしりとしたつくりつけの棚。照明も、トオルさんの店の極限までおとしたものとは違い、木の温もりを味あわせ、隣り合う他人の顔をてらす程度には、明るい。

おいしい珈琲の店。そんな感じだった。

「所長になったのは、去年の秋だ」

この人も、ギネスをおいしそうに飲む。

マリは、田崎がかたむけるグラスと、それを握る大きな白い手を漫然とみていた。

「え？」

「去年の秋だよ。前所長が突然でてこなくなってね。他になり手がいなかったんだろう」

ゆっくりと、笑う。

本当にそう思っているのか、謙そんしているだけなのか。その笑

顔からは推し量れない。

「31だったな」

弦の低いうなりが、一定の大きさでずっと響いている。それがなんの曲なのか、マリには分からない。

目の前の赤い液体をみつめ、しばし迷ってから、マリは口を開いた。

「田崎さんは……その時、なにか言われませんでしたか？……周りのひとから」

弦の音に聴きいるように目を閉じていた田崎は、ゆっくりとその目をひらいてマリを見返した。

「何かって？」

「たとえば……若すぎる、とか」

くすりと、田崎が笑う。

「たしかそんな映画があったな。さて……あったかな。辞令がおりた時、すこし驚かれてはいたね。部下になる所長補佐は、僕より10以上、年上だったし。同僚に、上司の腰ギンチャク呼ばわりされたこともあったかな」

くやしいとかの感情とは無縁の表情で、淡々と続ける。

「僕自身驚いたしね。当然の反応だろう。なにか特別、会社に貢献した覚えもなかったし。本部の部長や専務に取り入った覚えもなかったしね」

そこではじめてそのすっきりとした右頬に、皮肉な笑みが刻まれた。

「田崎さんが。田崎さんが所長になったのは、能力を認められたからでしょう？ それなのに……陰口なんかいうひとは、卑怯じゃないですか」

カチンッ

マリが、言葉とともに投げ出すようにして置いたグラスが、鳴った。

田崎はただ微笑んで彼女をみている。

「自分ができなかったから、だから嫉妬して、けなしているだけじゃないですか」

言いつのうちに、腹のそこからむらむらと怒りが込み上げてきた。

そう。マリは今日、バイト生活三カ月目にして「チーフ」になった。チーフとは、その時間帯にはいるバイトたちのまとめ役で、店長や社員がいない時にはレジを任される。バイトの一番上はリーダーと呼ばれる位置だが、チーフはその下にあたる。

閉店後、店長に昇格を告げられ、かなり驚きはしたもののやはりうれしかった。バイトをはじめてこの2カ月、メニューを頭にたたきこみ、バイト帰りのくたくたの身体で眠い目をこすりながら、イタリア料理の本を読むなどして勉強していたことが、報われた思ったのだ。

バイト先のレストラン「ANNAIS」では、バイトであろうと料

理やワインについて詳しい人がほとんどで、バイトから社員になった先輩も多い。テーブルマナーがどうのという堅苦しい店ではないが、やはり料理を運ぶさい、お客様にお出しする際の立ち位置や言葉づかい、声のかけかたまで指導された。

ひとによって教えてくれることが微妙に違ったり、メニューの説明ができず恥ずかしい思いをしたことがあったりと、なかなかキツイ2カ月を送って、この頃やっと一人前になれたのではと、思えてきたのだ。

現に、先輩の夕美子も今夜の人波が一段落した時、

「慣れてきたじゃない。その調子よ！」

そう、言ってくれていたではないか。

それなのに――――

「だれかが努力したことや何かで報われたと時に誹謗する人はひどい。しかも……陰で言うなんて……ずるいじゃないですか……」

悔しくて、また涙が浮かんでくる。

マリは慌てて目をしばたいた。

田崎は――さきほどからずっとおなじ笑顔のままマリをみていたが、

「バイト先で、なにか言われたのか」

質問というよりも確認するようにそう言った。

黙って唇をかむ、マリ。

「人と違えば、それだけ注目されるし、なにか言われることも多く

なる。言われることが良い時もあれば、悪い時もあるさ」

「なんでっ……なんで陰で言うんですか。うわべでは優しいこと言うのに、裏で………」

田崎に言ってもしようがないと分かっているながら、言葉が、悔しさがあとからあとからあふれてきた。

夕美子のほめ言葉に得意になっていた自分が、恥ずかしいと思う。はたで見ていれば、さぞかし滑稽だったろう。

「なにかが欲しくて、それを目指して一生懸命やって……。それは、いけないことなんですか？ 待たなきゃだめなんですか？ まだ早いから？ できるだけ控えめにしてなきゃいけないの？

それが……ひとつの上に立つことが目的じゃなかったのに……自分でやってみて、認めてくれたと思って……。うれしかったのに――」

頬をつたう涙が、ぽとりと音をたてて手の甲に落ちた。マリは、ぎゅっと唇をひきむすんだ。

だからお前はいつも、唇があかいんだ。

悔しいとき、怒ったときいつも唇をかむマリをみて、いつだかナリヒラがそうからかった。

田崎は――グラスに残っていたギネスをゆっくりと飲み干し、マリの話を聞いているのかいないのか。あいかわらず低く流れている弦の音色に聞き惚れているかのごとく目を閉じ、その口元は笑んでいるようにもみえた。

そんな田崎の横顔にちらりと目をやり、マリはひとつ、ため息を

ついた。

「すみません。田崎さんにこんなこと言っても……しかたありませんね」

その言葉に答えたのか、ちいさく笑う。

————この人は、なぜ、何を思っ
て誘ってくれたの
だろう？

マリの頭にふと、そんな疑問が浮かんできた。

8 (前書き)

すみません。書いてる本人も身体がむずがゆくなるほどリリカルです。

田崎は――仕事場で見る限り、いいひとだ。時折耳にする噂では、妻子持ちらしい。「大恋愛」の末結ばれた、愛妻家とも聞いた。

しかし、マリが知っているのはそれだけだ。

バイト仲間とはわりにのみに行ったりするが、直接関係のない「上の人」(?)とこうしてカウンターで並んでいるのも、考えてみれば不思議である。

関係ないからこそだろうか？

そんな田崎に勢いにまかせて愚痴ってしまったが、内心彼は、呆れているかもしれない。

マリは、急に胸がざわざわと不安に騒ぐのを感じた。

田崎のことは嫌いではない。勘違いがもとで知り合ってから、好意は持っているのだ。

妻子持ちと聞いた時、少なからずショックを受けたのも覚えている。

せっかく誘ってくれたのに愚痴ばかり言う自分のことを、彼は嫌になったのではないか……？

そう思うと、その考えがまるで真実のように思えて、マリはそわそわと田崎を盗みみてしまった。

彼の表情は店にはいつてから、少しも変わっていないように思える。

だがその柔らかな笑顔の裏側を窺うことなど、マリにはできなかった

た。

「――田崎さん」

「何？」

口元に笑みを浮かべたまま、田崎が見かえしてくる。

「怒ってないですか？」

きいた瞬間、マリはまた唇をつよくかみしめた。自分のその言葉や、そうきいてしまったこと自体が、ひどく情けないことのように思えてしまったからだ。

唇を、色が変わるほどきつくかみしめたまま俯いているマリを、田崎は小首をかしげてしばらく見ていたが、やがてなんとも言えない笑顔になった。

「君は、おもしろいな」

「すみません。変なことをききました」

言い訳のように急いでいう。

穴があつたら入りたい。

マリのそんな反応に、田崎の笑顔がさらにやさしくなった。

「『おもしろい』じゃ語弊があるか。不思議。そう、それがいい。ほんとうに、何でもないことを気にするんだな」

「小心者なんです」

「そうでもないだろう？ たぶん、強気にみえる部分と、いまみたいに気にしすぎる部分とが、アンバランスなんだろう」

ひとり納得したようにうなづく田崎だが、マリは顔をあげられない。

自分のいった言葉を、相手がどう思うか。

本当はこの人、わたしを嫌いなんじゃないか。

ひとの顔を窺うような自分のそんな考え方が、マリはひどく嫌だった。自分の中にそんな弱い部分があることを、認めたくなかった。

「普通」でいるのも、ひとと同じも嫌なのに。独りになるとたんに不安になってしまう。田崎が言うようなそんなアンバランスな部分、気にしすぎる自分をマリは受け入れることができない。だがだからこそ。その弱さを意識するあまり、ひとに悟られまいと必死になるのだ。

いまでも、相手が田崎だからというのではなく、凶星をさされたことで、マリは思い切りうろたえてしまった。

「……わたしは…わたしはでしゃばりなんです。礼儀も知らないし、ひとの言うことも聞かないし…いつも、いつも張り切りすぎて失敗するんです。でも、でもわたしは、ただ」

あとに続けようとした言葉はひどく言い訳じみているように思えて、マリはまた唇をかみしめた。

ただ、頑張ろうとおもった。

ひとの足手まといには、なりなくなかった。

はやく仕事をおぼえて、夕美子さんたちのようになりたかった。もっと、いろんな事ができるようになりたかっただけ。

ただ、わたしは、もっともつと……。

「いま持っているものだけで、満足しなきゃいけないんですか？ひとが持っている才能や特技や……それを目指して、欲しいと思っちゃいけないんですか？それは、デシヤバリなの？いけない事なんですか……？」

「『いけない事』だったらやめるのか？」

口元に笑みを浮かべたまま、田崎がいった。

「駄目だろうとほしいものは欲しい。他人にどう言われようが、ほしい気持ちは変わらずあるんだから、しかたないだろう？」

その柔らかな笑顔を、マリはぼかんと見つめてしまった。

「大人」として、諭されるものと思っていた。

世の中とはそういうものだ、と言われると決め込んでいた。

「でも、でもわたしはたぶん、もう十分に持っているんですよ？」

うろたえるあまり、さっきとは矛盾することを言ってしまう。

「充分？そうじゃないと思ってるから、欲しくなるんだろ？」

答えられない、マリ。

田崎が、当然のように言ってくれたから。諭すでもはぐらかすでもなく、当たり前だ。それでいいのだと、受け止めてくれたから。

やわらかく、強く、包み込むように。

「他人から見りや充分でも、お前が満足してなきゃ何にもならんだろ？望んでなにが悪い。欲しいものがある。どうしても手にいれない。そう思うのは、当然だろう？」

ゴチャゴチャ言う他人が、お前にそれをくれるのか？ほしいものがあるんなら、お前が自分でつかむしかないだろ？」

水みたいにギネスを飲みながら、マリをみすえて田崎が言う。
胸に何かがいっぱいあって、喉まででかかっているのに舌がもつれて出てこない。

望んでなにがわるい？
当然だろう？

耳の奥で、田崎の言葉がこだまする。
喉がやけに渴いた気がして、マリはグラスをぎゅっと握り、ひと息で飲み干した。

「ありがとう……って、言っているんですか」

つぶやくようにそう言ったマリに、田崎は一瞬きょとんとし、ついで、くすくす笑いながら彼女の頭をぽんぽんとたたいた。

「お前ね。なんでいちいち遠慮するかな。自分がしたいことすりやいいだろ？ お礼いわれて怒るやつがいるか？」

まあるい笑顔がそう言う。

「ありがとうございます……ございます」

耳まで真っ赤になったマリは、涙がでてしまいそうで慌ててうつむいた。

「ほら、遠慮しない」

笑顔のまま、田崎がマリのあごにそっと触れ、上向かせた。

「田……崎さん……？」

「涙は女の特権だ。どうせお前のことだから、『いま泣いたら田崎さんが迷惑する』なんて思ってるんだろう。俺は女好きだからいいんだよ。————ほら」

うろたえるマリの頬を、そう言って軽くつねった。

「……ふっ……う……」

大粒の涙が頬をつたい、そこから田崎の指へと伝わっていく。

「泣いて……いいんですかあ……？ だっ……て、でも……」

頬をつねられたままボロボロ泣きながら、なおそう言いつのるマリに、

「つねられ足りないか？」

田崎が笑いながら、もう一方の手をのぼす。

慌ててマリは首をふり、その拍子に涙が音をたててこぼれた。

なんで、こんなに涙がでるんだろう。

その答えも見つからないまま、マリは、ただ涙を流しつづけた。

9 夜中の電話

「—もしもし」

自分の声とは思えないほど、低い声。たぶん熟睡していたせいだろう。頭もおもい。

「……………ああ、起きてたか」

スルリと、受話器をとおして声が忍び込む。

マリは、時計にちらりと目をやった。

午前1時20分。

まっくらな部屋の中で、目覚まし時計の文字盤だけがぼんやりと光っている。

「電話で起こしておいて、それはないと思いませんか？」

文句を言いながらもくつつきそうになる目をこすりこすり、きちんとベッドから起き上がった。

「とらなきやいいんだ。こんな夜中の電話なんか」

電話機ごとキッチンへ持って行きながら、マリの口から笑いともため息ともつかない声がもれた。

「ケンカ、ですか？」

「俺は悪くない！絶対に悪くないぞ。あいつが、あいつが……」

きつといま、少し口をとがらせて、子供みたいにすねてるんだろ

うな。

忍び笑いが聴こえないよう、マリは送話口を押さえた。ついでに冷蔵庫から麦茶をとりだす。

ひとくち。

喉をすべってゆく冷たさが、眠気をほんの少し覚ましてくれる。明日―今日は、一限からなんだけどな。だれにともなく呟いてみる。

確かにこんな夜中の電話なんかとらなきやいいんだ。一度寝入ったらなにがあっても起きなかったのに……。

「――俺、だよな」

しばらく黙っていたと思ったら、しよげかえった声が聞こえてきた。

「……彼女は？」

「うん。……帰った」

「帰った？」

「……帰れって怒鳴ったから」

「仲直りしに行ったんですよね？」

「しようと思った。あやまろうと思ったんだ。でもな」

やれやれ。

仕事はさっさときっちりやるらしいのに。

とぎれがちな電話の声を聞きながら、マリはガラスの外側をつたう水滴を、ぼんやりと見ていた。

何回目だろう？　こうして夜中の電話を取るのは。

夜寝る前。

バイトが終わって、疲れきった身体を引きずって電車で足をかけた時。

いつも、一、二瞬考える。

ああ今日も疲れたな。今夜こそはゆっくり眠ろう。なにがあってもぜったい起きるもんか。

でも……もしかしたら……今夜もベルが鳴るかもしれない。

いつの頃からか、キッチンに置いていた電話機をベッドのすぐ横に移動させていた。

ぐっすり眠っていても、すぐ電話にでられるように………？

朝起きて、まず最初に電話に目を走らせるようになったのは、いつからだろう？

「俺がなにか言うだろう？　そしたら黙るんだ。『黙ってないでなんか言えよ』そう言ったら、謝るんだ」

電話の向こうからは、繰り返していた彼の言葉がもれてくる。

「あいつは悪くない。この前のケンカだって、俺が原因だ。いつも悪いのは俺で、あいつを悲しませている。ただ……言いたいことがあるなら言って欲しいからきいてるのに………」

「思ってることをうまく言葉にできない人は、多いと思います。そ

れに、怒って欲しくないから謝っちゃうんでしょう？」

「自分は悪くないのか？あいつはいつつも黙り込んで、自分のなかに溜めて……」

「『黙ってこっくり頷いて。自分の気持ちより俺の気持ちを考えてくれるんだ』ってのろけてたの、誰でしたっけ？」

「……俺」

ケシヨンとしている。

なぜわたしには言えて彼女には言えないんだろう。

「いま何処ですか？」

ため息まじりにマリは聞いた。

「ん？……『Poursuite』」

遠慮がちに答える声。　こうやって電話してくる夜は、必ずそこにいる。

最初に連れて行ってくれた、飴色のカウンターの店。

「……いまから、来れないよな……？」

一、二瞬の沈黙のあと、こう言うのもおなじ。

午前3時。

いまから行けばそうなるな。

「……1時半ですね」

「1時半だな」

いまこの人は、どんな顔をしているのだろうか？

「寝てたんですね、わたしは」

「……うん」

いまから行ったところで、どうせこの人はすぐに寝てしまうのだろう。

いつものように。

「どこですか？お店の前でいいんですか？」

結局、わたしはこう答えてしまう。

「うん。……待ってるからな」

安堵したような、急に元気になったような、彼の声。それじゃ後でと電話を切り、急いで着替える。

口紅を塗りながらふと鏡の中の自分と目があつた。目の下に隈のできた眠そうな顔。

「馬鹿だよなあ………」

それでも鏡の女は笑っていた。

10 「大人」になるとは

「お疲れさまでしたー」

倉庫のような、天井の高いスタジオ内に、ぼくの声がこだました。

「お疲れさん」

「おつかれー」

呼応するようにそこそこでスタッフたちが声をかけあい、ハレーションをおこしそうなほど眩しかった照明も、次々と落とされていた。

「新さん、お疲れさまです」

まだ真っ白なバックスクリーンを黙然と見つめつづけていた師匠に、ぼくは声をかけた。

「ん？ーああ」

夢からさめたような表情でふりむく。
と。

「なあナル。お前、ここに来てどのくらいになる？」

突然そう聞いてきた。

レンズの焦点をあわせてゆくように、新さんは視線を細く研ぎすませてぼくをみている。

「えっ……と、そろそろ一年になりますけど……?」

あごを引きみにして答えた。

「———そうか」

ファインダーを覗いている時よりももっと鋭い視線ははずされ、バックスクリーンに戻った。

「なんですか?」

質問と視線の意味がわからず、ぼくは目をおよがせた。

いつの間にか、スタッフはみんな帰ったようだ。ガランとしたスタジオ内には、ぼくと、家主の新さんのふたりだけ。

—なんだ? なんか失敗したっけ? いきなりクビとかじゃないかな?

「お前、カメラマンになる気はないのか」

ガシャン。

彼の眼のシャッターがおりた。

きつとぼくの間抜け面を焼き付けたことだろう。

「……プロとしてって事ですか」

そう問い返したぼくの声は、へんに裏返っていた。

「そうだ」

短くこたえる彼の眼はもう細く絞り込まれ、つぎのシャッターチャンスを狙っている。

「急に……どうしたんですか？」

彼の眼から逃げるように視線をはずした僕に、新さんは一葉の写真をつきつけた。

「この前の現像分に紛れてた」

ぼくの眼は、それに吸いよせられた。

「お前が撮ったんだろう？」

「はい」

「焦点があまい。焼きすぎて白が死んでる。液に浸けすぎたか。時間をきちんと計れていつも言ってるだろう？ だが」

目の前に、それが押し出される。

「いい写真だ。この娘がいいって意味じゃないぞ。この娘はたしかに可愛いが、写真のよしあしを決めるのは、モデルじゃない。撮る人間の一瞬の想いだ。被写体に対するな」

春の――午後だった。

玄関のカギが、珍しくかかっていなかった。

部屋の奥から風が吹いてきて扉を開けた。

彼女は、ベランダにいた。

ベランダと部屋の間の敷居にクッションをひいて、窓の枠にもた

れていた。

ゆったりと、やわらかな眠りの中で漂いながら。

「この写真にはやさしさがある。この子を守りたい。そんな想いが」

そう、そう思った。

なんのていらいもなく、ただ無心に眠っていた彼女。

「お前が建築やってて、写真はただの趣味ってのは知ってる。けどな――」

「新さん」

プロの眼が、ぼくを見る。

ぼくの、困惑した表情を。

「何だ」

「ぼくにはプロの意識や、意欲なんてものがないんです。新さんがファインダーをのぞくような、鋭い眼がないんです。それに、この写真は……」

あとが続けられない。

「恋人か？」

「違います」

プロの眼は、ぼくの笑いからなにを見てとったろう。
そうかと彼は口の中で呟き行きかけたが、

「さっきも言ったがプロの意識なんざ二の次だぞ。大切なのは思い入れだ。―それに対するな」

ぼくの手には、そっと写真をのせた。

11 彼女の涙

「カメラマンさん、お疲れさま」

アパート前の路地を歩いていると、低めの甘い声が降ってきた。

「……マリ。どうした？」

見上げれば、彼女がベランダで手をブンブンふっている。

「月が奇麗じゃない？」

機嫌よさげにそう言っただけ空をさす。

よく見ると、片手にはビールの缶が握られていた。

「お前……蚊にくわれんぞ」

我ながら間抜けなセリフだ。

「平気平気。わたしをくう蚊なんていないから」

なんか、あったかな。

コロコロと機嫌よく笑う彼女を見上げながら、なんとなくそう思った。

彼女は普通、家で、しかもひとりで酒は飲まない。

もちろん、一緒に暮らしているわけではないから断定はできないが、すくなくともぼくが知るかぎりはそうだ。

「いま行くからちょっと待ってろ」

ぼくは急いでアパートの階段をかけあがり、自分の部屋のドアを素通りして、まっすぐ隣の、彼女の部屋に向かった。

「いらっしゃーい」

一応ノックしてから開けると、マリはさっきと同じくベランダにいて、にこにこ笑いながら手招きしている。

その素足の足元には、封のあいた6缶パック一箱、そしてひしやげた空き缶がいくつかが転がっていた。

その間に鎮座するのは、ピンクの豚の、蚊取り線香台。薄い煙が立ち上っている。

「ナリくんも飲むよねー？」

玄関で突っ立ったままのぼくに、足元の缶をひとつ取って振ってみせる。

「ほら、はやくはやく」

「わかったよ」

ため息ひとつ。

ぼくはせかされるままに、のそのそとベランダへ向かった。

「はいカンパーイ！」

泡が飛び散るのもおかまいなしで、彼女は缶をふりまわし、コクコクとおいしそうにビールを飲む。

「ほらほら、ナリくんも飲んで」

ぼんやり彼女を見ながら持ったままだったぼくの缶も、さっさと開けてしまう。

「元氣ないぞー？なんかあった？」

「なにかあるのはそっちだろ」

笑顔が、一瞬にして消えた。

赤い色をつけた爪の横にころがる、ビールの空き缶。

うつむく彼女の向こうにあるサボテン。もうすぐ花が咲きそうだ。壁のポトス、部屋にいた方がいんじゃないのか？

うつむいたままの彼女にどう対すればいいのかわからず。横で所在無くビールをなめながら、ぼくはそんなどうでもよいモノを見ていた。

と。

「ナリくん、わたしのこと好き？」

ゴフツ！

すんでのところで、ビールを吐き出さずにすんだ。

「ねえ、好き？」

うつむいていた顔をあげ、まっすぐぼくをみて、笑顔でくりかえ

すマリ。

その邪気のない表情のおかげで、ぼくは自分の狼狽を隠すことができた。

「何があった？」

問いかけに、彼女は首をふる。

「マリ？」

「前はね、昔はこんなふうになんて、絶対にできなかった。だって、怖かったんだもの。『きらい』。その言葉がこわかった。友達にさえ、冗談でもきけなかった。聞いたとたん、その子が離れていっちゃう気がしてきけなかった」

寂しそうに、ほんとうにさびしそうに、彼女が笑う。

「ひとから好かれてる自信なんてまるでなくて。試すためにわざと乱暴にふるまったり、きつい言葉を使ってみたり。」

『わたしは冷たい人間だから』

はじめから、自分からそういつて相手を牽制してた。案外冷たいひとなんだなんて、あとから絶対に言われなくなかったから。失望したような、あきれたような表情をされるのがとてもこわくて、いつもびくびくしてた」

月明かりを頬にうけながら、缶をかたむけひと口。

「なのにな」

ふと、笑った。

「いつも前だけ見てるみたいって言われてたの。悩みなんて、ないんでしょって。いつもこわかったのに。いつか皆、わたしから離れていくかもしれないってびくついてたのに。でも誰にもきけなかった。わたしのこと好き？って、きけなかった」

あの透明な瞳が、ぼくをみつめた。

大きなその瞳は揺れてはいたが、潤んではいなかった。

冴えざえとしていた。

かける言葉がみつからないくらいその瞳はその底まで澄み、その光がぼくをまっすぐに射た。

「そんな自分が……嫌いだったのか？」

いきなり、彼女の両目から大粒の涙がこぼれおちた。

瞳だけは変わらず冴え冴えとしているのに。

「そう……ううん、違う。嫌いじゃなかった。好き、大好きだった。だけど、そんな自分を好きでいてくれる人なんか一人もない気がして、すごく悲しかった。

嫌いな部分もあったよ。でも、みんなが見ているのはその部分だけのようにも思えて。ひとが認めてくれないのが、なによりも悲しかった。自分ではすごく好きなのに、誰もそう言ってくれないから、自分の好きな気持ちまで否定しいたこともあった」

涙がぼたぼたと音をたてて落ちつつづけている。

「逃げ出したくて、いつも変わりたいと願ってた。自分はこんなんじゃない。いつかすごくなる。きっと誰かが変えてくれるんだって。ずっと、ずうっと待ってた」

「マリ、マリもういいから」

イヤイヤと駄々をこねるように首をふり、泣き続ける彼女を抱き締めたかった。

「もういいから。もう泣かないでいいから」

そんな言葉じゃなく、身体で彼女を包んで安心させたかった。ほかの誰がお前を嫌っても、自分だけは絶対にお前を好きでいると、心臓ごしに伝えたかった。だけど。

「大丈夫だから。もう泣かないでいいから。誰もお前を嫌いになつたりしないから」

こう言って彼女の頭をなでるのが、ぼくに許される精一杯だ。

「な？顔をみればわかるんだろう？オレも、お前の友達も、お前がなにをしようと嫌いになんかならない。そんな奴いない」

くしゃくしゃと彼女の髪をかきまわしてみた。マリは、うつむいてされるままになっている。手から伝わってくる、その柔らかな感触。このまま少し力をいれて少し引き寄せれば、この手に抱くことができる。

ほら、ほんの少し。

「ナリくん」

ふいに、彼女が顔をあげた。

大きな瞳からはもう、涙は流れていなかった。

「あ、うわ、ごめん」

とっさにそう言って離しかけたぼくの手を、マリがぎゅっとつかんだ。

そのまま自分の胸元におしつけ、涙であらわれてさらに澄んだ瞳でぼくをみつめた。

「ごめん、ナリくん」

「へ？」

つかまれたままきわどい部分に触れている右手が気になって、ぼくはひとり視線を泳がせる。

「心臓の、音を聴かせて」

形のよいちいさな耳をぼくの胸にぴたりとつけ、彼女は目を閉じた。

「……こうすると安心するって言うでしょう？ すこしだけ、胸貸してね」

その態勢のまま、マリがそう言った。

押し付けられたちいさめの頭は、ぼくが呼吸するたび、それににあわせて上下している。

「……どうぞ」

平静な声でそう答えられたのが、我ながら不思議だった。

彼女が胸に頬をよせた瞬間、ぼくの心臓は確実に一度止まり、その後もものすごい速さで打ちはじめた。

もちろん、ぴったりつけた耳から彼女はその音を聴いていただろう。

手は、まだ取られたままだ。しっかりと彼女の胸におしつけられ、動かすことができない。

たった一枚の布越しに伝わる、ぬくもり。鼻孔をくすぐる香り。

このまま抱き締めてしまいたい。

腹の底からふつふつと沸き上がるその強い想いをなんとか押さえ込んで、左手に持ったままのビールがぬるくなるまで。ぼくはずっとその姿勢でたちつくしていた。

11 彼女の涙（後書き）

ああ
青春。

12 それでも

「中井……さん？」

煙のむこうから、その声は飛んできた。

「田崎さん」

彼女の声が、うす闇のなかに弾んでぼくの背中をうつ。声の飛んできた方をみやると、「田崎さん」がカウンターの端、ぼくらの定位置にすわってこちらを振り返っていた。

女連れで。

「こんばんは」

会釈するマリ。男のとなりにも。

「今夜は男連れか？」

彼女のとなりに座って、ことさらぼんやりと棚に置かれた酒瓶を眺めようとしていたぼくの耳にも、その上機嫌な声は届いた。

「田崎さん」を見るのは二度目だ。いつもこの店で。そしていつも、いやな気分になせられる。勝手な言い草だとは十分承知しているが、ぼくのテリトリーを侵略されている気分になるのだ。

横目で、マリを盗み見た。

彼女はーいつもどおりだった。背の高いスツールに浅く腰かけ、

真っ赤な液体を静かに口に運んでいる。

おいおい。お前はあいつが好きなんじゃなかったのかよ。

「中井……さんもデートか。若いっていいねえ」

マリからひとつ空いた端でカウンターにもたれ掛かるようにして座りながら、「田崎さん」がグラスをかたむけのんきにそうつぶやいた。

男のくせにやけに白いそのふぬけた顔を、思いきりぶん殴りたくなかった。

「田崎さん、あんまり酔っ払うと彼女に嫌われますよ？」

たしなめるようにマリが笑う。奴の隣りにも、「ね？」と目配せする。

その表情はどこまでもおだやかで、楽しげですらあった。

「俺、そんなに呑んでないよな？」

甘えるように、男が女に問いかける。

「嘘……。それで3本目」

色素のうすい髪が男のとなりでさらりと揺れ、そのひとは困ったように笑った。

綺麗な女だな。

思わず、つぶやいてしまった。どこことなく線が細い、「女の人」。

守ってやりたいと、男なら誰でも感じるだろう。

「お前まで、あの子の味方するのか？」

男はおおげさに頭を抱えてみせる。そこで、そろって忍び笑い。
いい気なもんだ。両手に華か、色男。

ぼくは、だんだん嫌になってきた。マリはなんでこんな男がいいんだ。

「おい……おい、マリ」

微笑んで彼らを見ている彼女を肘でつついた。

「何？」

「あれは、奥さんだよな？」

自分には関係ないと思いつつ、それでもやっぱり気になった。

どう見ても、田崎と連れの女は「知り合い」や「友人」の関係とは思えない。もちろん、「上司と部下」にも。

だとしたら、「夫婦」しかないだろう？

マリは、しばしばくを凝視していた。瓶の底でも覗き込むような、真意を探るような顔をして。

決まり悪くなったぼくが少しあごをひくと、

「『彼女』よ」

うなずいて、笑った。

女の子が突然、女の表情になっている。

「彼女って……」

「お先に」

意味をはかりかねてまごついている間に、田崎は『彼女』を連れて帰っていった。

「ちょっと待てよ。『彼女』ってなんだよ」

ぼくに背を向け、ゆらゆら揺れる入り口の戸をじっとみていたマ
リに、思わず詰め寄った。

「彼女よ。……愛人とも言えいいのか？」

振り向きざま、挑戦的な目がぼくを射た。

「何なんだよ。つまり……不倫ってことか？」

「そうよ」

「——そうよってお前……」

彼女に言ってもしょうがない事くらい、わかっている。

妻子持ちの「田崎さん」。

それでも、彼を好きなマリ。彼に「彼女」がいても。それでも。

「何なんなんだよ。なんだあの男は。お前、そんな男が好きなのか
よ」

「好きよ」

まっすぐにぼくをみてマリは即答した。

なにを言われようと、あの男を守るとその瞳は言っているように

思えた。

「……前にも言ったでしょう？しょうがないのよ。だって好きなんだから。奥さんも子供もいて、彼女もいて。わたしが好きになった時にはそうだったんだから、仕方がないじゃない」

「じゃ、なんであの男はお前ともいっしょにいたんだよ。しかも二人っきりで」

声がうわずっている。

トオルさんがこちらをうかがっている。

マリがうるさそうにそっぽを向いた。

「いっしょに呑んでるだけじゃない」

「あの男は、お前にも手をだそうとしてるだけだろ！？」

勢いで、言ってしまった。

マリが、ゆっくりぼくに向き直った。すうっと息をすう仕草をして、大きな両目をゆうるりと細めて。

怒っている。彼女はいま、ものすごく怒っている。

平手打ちを食らわしたいほど、でも触れるのも嫌だと思ってくらいに怒っている。

「だってそうだろ？妻子持ちで彼女もいるくせに、お前を誘ってるんだろ？お前があいつのこと好きだと知ってて、利用して」

「ナリくん」

弁解がましくまくし立てていたぼくを、彼女はひとことで封じた。

「……なんだよ」

「あの人は……田崎さんは、正直な人よ」

「正直？何がー」

ちらりとぼくを見る、マリ。

黙るしかない。

「『好きだから仕方がない』って、あの人の言葉でもあるの。田崎さんはわたしを好きじゃない。そんな事わたしが一番知ってる。だって、いっしょに飲んでるのに、夜中に電話なんてしてくるのに、なんて言うと思う？」

「……なんだよ」

「『また喧嘩した。なんであいつに優しくできないんだろう？』……わたしはいつも彼の愚痴を聴くだけ。それだけよ」

「なんで……お前、利用されてるだけじゃないか。全然、幸せじゃないじゃないか……！」

なんでだよ。なんでそんな男を好きなんだ？
なんで、そんな男を待つんだよ？

「ナリくん……」

いつの間にか、ぼくは大声になっていたらしい。
マリがそっと、たしなめるようにぼくの腕に触れた。見回すと、近くにいた何人かの客がこちらを見ていた。

「ナリくん……そんなに興奮しないでよ」

「別に」

唇を引き結んだばくに、なだめるような微笑。

「ね、ナリくん。愚痴を聴くことだけが、わたしにできることなの。好きなのは、わたし。あの人を必要としているのも、わたし。すこしでも側にいたいと願っているのはわたしなの。」

あの人の弱さ……こう言っているのかな？好きになったら求めずにはいられない。でも後で悩んじゃう弱さ。それがわたしには必要なの。だって、その弱さがなかったら、本当にわたしなんて割り込めないもの。

好きだから……好きで仕方がないからあの人がどんなでも受け止められる。だって、それがあの人だから。――わたしは馬鹿よ。なんの、誰の為にもなってない。でもね」

マリはそこで言葉をきり、ぼくの目をじっとのぞきこんだ。

その冴え冴えとした瞳は、いつかの夜を――彼女が泣いたあの夜を思い出させた。

「わたしは、あの人……田崎さんにだけはそうしたい。この世で一番好きな、あの人にだけはそうしたい」

満ち足りた、凜とした彼女の瞳。ぼくを素通りしてあの男へと向けられている。

もういい。もう聞きたくない。

これ以上彼女の口から、あの男のことなんか聞きたくない。

——マリ。

お前は馬鹿だ。大馬鹿だよ。
でも。

そんな彼女を好きなぼくが、
一番馬鹿だ。

12 それでも（後書き）

恋とは愚か者のすること。
一理はあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6097s/>

彼女

2011年11月29日14時47分発行